

**財団法人鍋島報効会研究助成
研究報告書 第2号**

2006年1月

財団法人鍋島報効会

目 次

第3回研究助成報告

金岩昭夫「経綸舎から勉脩學舎へ」	1
佐賀県立厳木高等学校科学部	
「土壌シードバンクを用いた自然再生の研究」	13
岸原信義「佐賀平野における藩政時代の治水遺構に関する研究」	41
家田淳一「朝鮮へ輸出された江戸時代の肥前・対州磁器」	59
まちづくり市民の会 池田智子	
「佐賀城下の歴史・文化の掘り起こし 一片田江七小路、古老からの聴き取りを中心に」	87
報告会講評	117
佐賀県立佐賀城本丸歴史館 館長 杉谷 昭 先生	

第4回研究助成報告

藤 泰治「松浦党有田氏と鍋島藩有田代官所」	121
横山 学「肥前刀の総合的な研究 一八代忠吉の懸案事項、新左衛門銘の再検討一」	135
末岡暁美「佐賀と沖縄との関係 一明治期・沖縄で活躍した佐賀県人一」	153
中村 真「佐賀県における「戦争碑」に関する一考察 一明治二十年前後の招魂碑を中心に一」	171
報告会講評	187
佐賀大学学長 長谷川 照 先生	

経綸舎から勉脩學舎へ

佐賀県立有田工業高等学校

金 岩 昭 夫

1. 勉脩學舎創設者 江越禮太



有田小学校所蔵

江越禮太（小城藩士、白川小学校校長）は文政10年（1827）11月11日（～明治25年（1892）1月31日）小城郡小城町新小路の小城藩士 仁兵衛道順、母無禰子^{よりね}の男として誕生した。幼名を愛吉郎、諱は道容^{みちやす}、號を如心又は陶翁、白溪、九十九溪、竹山人、三酌翁等があった。

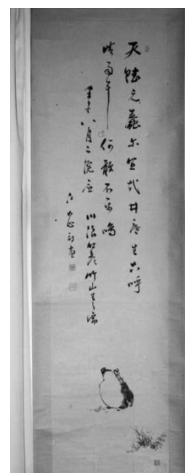
資性（うまれつき）宏量^{こうりょう}（度量が広い）恬談^{ていたん}（あっさり）敢て人と逆らわず。天保年中（1830-1843）小城藩校興讓館（小城町桜岡小学校の前身）に通学し、天保11年（1840）頃佐賀弘道館教授草場佩川の家塾に入学、3年余り漢文を修めた。再び興讓館寄宿生となり、在学五カ年天性学才あり殊に詩学に造詣深く又書画を能くせられその遺墨として現に敬服するもの少なからず。嘉永元年（1848）小城藩庁請役附見習を3年余りする。嘉永4年（1851）江戸に遊学

して昌平黌（現在の東京大学）に学ぶ（同期生に森有禮 後文部大臣）や傍ら幕府の儒官古賀謹堂（精里の三男洞庵の子で謹一郎又は茶溪という）の学塾に入学し儒官の信認厚く後塾長に推され在塾前後凡そ8年。

嘉永6年（1853）7月17日米国の使節ペリー艦隊が伊豆浦賀に停泊し、和親条約を^{せま}逼り、翌安政元年（1854）にはロシアの使節海軍中将プチャーチンが長崎に来て樺太所領の件で幕府に和親通商を求めてきた。当時外交の要務を^{にな}擔う幕府大目附筒井肥前守政憲、勘定奉行川路左衛門、目附荒尾土佐守成允及び儒臣古賀謹一郎等が接したが、古賀は正使として応接談判の衝に当られ、昌平黌より江越禮太を選抜して是に随行させた。政憲等は不得要領なる返答を以てプチャーチンを追い返した。此時の功績により小城藩主鍋島直堯は私領松浦郡の久義島（又は釘島、元山代領だったが、小城領となり今黒川村に編入）を江越禮太に与えた。

当時、津和野藩洋学者として知名の西周、津田真道の両氏に通学して英語を研究している。

奥州の河井秋義と親交もあった。江越禮太は安政5年（1858）多久西ノ原町沢井泰助長女タメと結婚する。長男孝太郎（海軍機関少将）は父が創立した勉脩學舎に入学し、明治15年9月には授業生を退校、香蘭社に入る。次男米次郎は通信省事務官として東京、韓国、小倉郵便局長を歴任し、昭和2年有田町有志の懇望により昭和3年～14年まで有田町町長となっている。



嘉永5年書
有田工業高等学校所蔵

土壌シードバンクを用いた自然再生の研究

佐賀県立厳木高等学校科学部

1. 概 要

(1) 目 的

全国的に自然再生事業が注目を集めている中、厳木高校の近辺でも、『アザメの瀬自然再生事業』が行われています。そこで、私たちも、地元の方々の協力を得ながら、シードバンクを用いて、自然再生の研究に取り組みはじめました。本研究では、次の4つの目的を持ち、活動を行っています。

- ① 深い土の中で休眠していた種子を発芽させ、その植物の成長の様子を調べる。
- ② 発芽した植物の種類や名前を調べる。
- ③ すでに絶滅した植物や絶滅危惧種等を発見した場合は、その生育に適した環境を調べる。
- ④ 気温・水温・天候等の変化によって、植物の成長に変化があるかを調べる。

(2) 手法と資材

土壌シードバンクを用いて研究しています。調査に用いたシードバンクの土は、武雄河川事務所の方から、唐津市相知町佐里のアザメの瀬で深く掘った土をわけていただきました。第1段階として、屋内型シードバンクを製作して、サンプル土壌からどの程度種子が発芽するかを確認しました。第2段階として、捲き出し土壌の表面積を大きくとり、埋土種子がより発芽できるように、屋外に大型のシードバンクを製作し調査を進めています。

(3) 所見と結論

乾燥状態の深さ0～3.8mの全ての土壌から植物の出現が確認できました。また、湿地状態では深さ0～1.5mと深さ2.5～3.0mのみに植物の出現が確認できました。

深さ0～1.5mの土は人の手によって入れられた耕作土ということがわかっており、この土壌では、乾燥と湿地のどちらの状態にしても、コケ類が一番多く、次にイネ科、カヤツリグサ科の植物が多く生え

佐賀平野における藩政時代の治水遺構に関する研究

－「湾内」遊水地の構造と機能に関する研究－

佐賀大学低平地研究センター

岸 原 信 義

1. はじめに

サブタイトルの「湾内」とは、図1の平川と祇園川とに挟まれた地域の最下流端の地区を地元の人が名付けたもので、洪水時には一面が「湾」のように水浸しになる事に起因すると云われている。嘉瀬川左岸でこの地区とほぼ同じ機能を有する地区は徳永川・黒川・市の江水路が合流する一帯で「沖田」地区と呼ばれている。これら二つの地区に共通する特長は、先ず第1に地区の下流端で上流部の河川が全て合流している事であり、第2に地区の最下流端の標高がほぼ5mで自然堤防地帯とデルタ地帯との遷移地帯、つまり満潮時の感潮限界である事である。佐賀平野は干満の差が激しい有明海に面している。そのため干潮であれば容易に流下できる洪水も満潮時には滞留して氾濫・破堤する可能性が大きくなる。その防禦の施設が満潮時に機能する遊水地（満潮型遊水地）で、「湾内」や「沖田」地区はその典型的なものである。この様に満潮時の洪水処理に特化した遊水地、「満潮型遊水地」は他平野での調査・報告がなく、佐賀平野独特の卓越した治水施設であると思われる。佐賀平野には、このタイプの遊水地を含めた多種多様な遊水地を含む藩政時代の多くの治水遺構が残されており、日本唯一の藩政時代における治水遺構の博物館と云うことが出来る。従来紹介されることの無かった「湾内遊水地」の調査・研究を通じて、日本における「流域治水」システムが初めて確立されたと思われる佐賀平野の治水遺構の一端を紹介する。また、藩政時代の治水遺構は単に遺構としてでなく、現代の治水に生かされているものが多く、また今後生かしていくべき貴重な治水システム・治水施設である事を強調する必要がある。本研究の背景には、最近これら藩政時代の治水方法の発掘・活用が提言される機運にあり、その経緯などを以下に述べる。

(1) 「河川伝統技術」（治水遺構）の発掘と活用の経過

わが国の治水方針の基本的な変換は既に昭和50年代から萌しがみえていたと大熊¹⁾は述べている。例えば、昭和52年に河川審議会は「総合的な治水対策の推進方策についての中間答申」で、今までの河道のみによる計画対象とした力ずくの治水計画から、流域全体を対象にいったソフトな治水計画への変換を主張している。流域対策としては、保水・遊水機能の確保、洪水氾濫の発生を前提とした土地利用や建築方式の設定があげられている。

更に、昭和62年に河川審議会は計画を上回る様な洪水に対して「超過洪水対策及びその推進対策はい

朝鮮へ輸出された江戸時代の肥前・対州磁器

佐賀県立博物館

家 田 淳 一

はじめに

「伊万里」と呼ばれた肥前磁器が、江戸時代に長崎から東南アジアやヨーロッパ諸国へ海外輸出されたことは広く知られている。これに対し、対馬を介しての朝鮮輸出が行われていたことは、一般にはほとんど知られておらず前者に比較すれば研究の蓄積は極めて少ない。そして特にその輸出品自体が韓国内で確認されたことは皆無であった。また、江戸後期には肥前以外に対馬自体でも磁器生産が行われ朝鮮へ輸出された。

本稿の目的は、江戸時代における肥前および対州磁器の朝鮮への輸出を先学の研究に導かれながら再検討しつつ、韓国内の遺跡出土遺物から肥前磁器等を確認して、江戸時代における日本磁器の朝鮮輸出を現状で可能な限り明らかにすることである。なお産地は有田内山、外山と称された地域を有田、それ以外の肥前地域の窯場を肥前、そして対馬島内の窯の製品を対州とする。

一、肥前・対州磁器の朝鮮輸出の研究史

江戸時代に肥前磁器が朝鮮へ輸出されていたことは、明治時代から指摘されている。初期の代表的なものとして次の文献をあげることができる。

- 1、著者不明「制度考」明治20（1887）年¹
- 2、北島似水「日本陶磁器史論」明治36（1903）年²
- 3、寺内信一「有田皿山雑記」昭和5（1930）年³
- 4、横尾謙 徳見知敬「有田陶業史」昭和6（1931）年⁴
- 5、寺内信一「有田磁業史」昭和8（1933）年⁵
- 6、中島浩気「肥前陶磁史考」昭和11（1936）年⁶

1 著者不明「制度考」第二編巻の二 第十四章の付録 1988年 有田町史 商業編II（原典は1887年の草稿）

2 北島似水「日本陶磁器史論」1979年 復刻 五月書房（初版1903年、再版1910年）

3 寺内信一「有田皿山雑記」1930年

4 横尾謙 徳見知敬「有田陶業史」1931年

5 寺内信一「有田磁業史」1933年

6 中島浩気「肥前陶磁史考」1936年

佐賀城下の歴史・文化の掘り起こし

～片田江七小路、古老からの聴き取りを中心に～

まちづくり市民の会「古老に話を聴き地元を知る部会」 部会長

池 田 智 子

はじめに

2002年10月に佐賀大学地域貢献推進室分室・佐賀大学まちづくりサテライト「ゆつつら〜と館」が佐賀市呉服町名店街内にオープンし、まちづくり市民の会はゆつつら〜と館を拠点に「市民による市民のためのまち」を築きあげることが目標に、同年11月に発足した市民団体である。本会が描くまちづくりは「平成の佐賀城下づくり」であり、その実現に向かって「古老に話を聴き地元を知る部会」他4つの部会を立ち上げ活動している。

そこで本報告では調査の対象地域を、ゆつつら〜と館に近く街路と水路が交互に平行に並んで江戸時代の城下町を偲ばせる片田江七小路付近に絞り、この地域にある伝統や文化などを文献や古老の話から掘り起こし、これからの佐賀のまちづくりの一助になることを願っている。

1. 佐賀の城下町

佐賀市は佐賀藩政期、35万7千石の城下町としての歴史があり、江戸時代の主要道路であった長崎街道が東西に通っている。佐賀城の防衛のためジグザグ状に走っているが、今なおその形を残しつつ一般生活道路として利用されている。図1をみると、城内の様子は随分変わっているが、その他はほとんど変わっていないことがよくわかる。

市街地に張り巡らされた排水・利水システム網は生活用水路、排水路として利用されてきており、主要水路から宅地の背割線に規則的に配置された細水路によって各家に取り組みまれてきていた。近年は上下水道の整備で市民生活と水路との関係は小さくなってきており、図2より、川幅が随分狭くなったり、細水路が見当たらなくなったりしていることがわかる。内堀の東側が埋め立てられているのも残念なことであるが、水路も道路と同様、江戸時代の面影を十分に残しているといえる。

このように佐賀は第2次世界大戦時にも大きな被害を受けなかったため、市街地の中心部は歴史的形態をよく残しているといわれ、城下町時代の道路パターンと水路パターンが今なお、佐賀市市街地空間の骨格を形成している。

第3回研究助成報告会講評

佐賀県立佐賀城本丸歴史館 館長 杉 谷 昭

1. 経綸舎から勉脩學舎へ

佐賀県立有田工業高等学校 金 岩 昭 夫

<評>

明治時代の実業教育の先駆者である、江越禮太を中心に、公私にわたる豊富な資料・史料を縦横に蒐集・調査して、江越およびそれを取り巻く教育者・政治家の動向をも明らかにした、明治実業教育史であり、総合的な人物研究である。それぞれの歴史事象と絡めて、単に教育界のみならず明治史全般にわたってその政治過程を明らかにしている。すなわち産業・経済の分野にも考察が及んでいる。史料・資料の蒐集に当たっては、地元の有田地方はもとより、県下各地に及び、東京目黒の久米美術館・東京大学法学部の明治新聞雑誌文庫所蔵の資料にまで及んでいる。また「白川小学校日誌」など貴重で、興味深い資料もある。膨大な資料が豊富に引用されているので、江越禮太研究・実業教育・有田窯業史の貴重な資料集でもあり、百科事典ともいうことが出来る。その意味でも、人名・事件名の索引および年表を将来まとめられることを期待したい。

2. 土壌シードバンクを用いた自然再生の研究

佐賀県立厳木高等学校科学部

<評>

武雄河川事務所の「azame」の瀬自然再生事業に付随して、「深い土の中で休眠していた種子を発芽させ、その植物の生長の様子を調べる」・「発芽した植物の種類や名前を調べる」・「すでに絶滅した植物や絶滅危惧種等を発見した場合は、その再生を行う」・「気温・水温・天候などの3つのことで植物に変化があるかを調べる」などのことを目的とする純粋な基礎的科学の実験である。したがって無目的（結果を予測できない）実験ではあるが、それだけに極度に厳密さが要求される。最近、消滅していく植物が多くなっている時に、このような研究は非常に重要である。同種の植物は群生すると同時に、土壌に適合するといわれている。したがって人間が自然界の調和を乱すと、植物はまとめて消滅したり、突然変異を起こすようなことが起こる。

この研究は慎重、かつ忍耐強く続けられている。また同じような研究を試みるものにとって、その方法論を明らかにしている。さらにその考察は、共生する小動物にまでおよんでいる。このように研究の態度には、植物・動物などに対する愛情さえ感じられる。専門家からの助言も的確に生かされている。今後に期待するところも大きい。このような自然再生の運動も広げて仲間づくりにも努力していただきたい。

松浦党有田氏と鍋島藩有田代官所

地域づくり研究所 伽企画 代表
藤 泰 治

はじめに

西有田町は、佐賀県の西部に位置し有田川流域に沿い、西になだらかな国見連山が南北に連なり、稜線を境にして長崎県世知原町、佐世保市に接している。東は名水百選、水源の森百選に指定された竜門の清水が流れる竜門峡など、山紫水明の自然が今なお残っている。また、柿右衛門様式や古伊万里など磁器の生産に関係の深い伊万里市と有田町の間位置し、人口はおよそ1万人の農業とやきものが中心の町である。

有田川は広瀬川・浄源寺川・山田川などの支流を併せて北流し伊万里湾に注ぐ。原始・古代は、伊万里市を含む有田川流域やその周辺には、先土器から縄文への移行を残す白蛇山岩陰遺跡、縄文早期の坂の下遺跡などが残っている。中世になると伊万里市東山代町川内野の山ノ寺には、松浦党と呼ばれる武士集団の創成期の居館と推定される石組みが残っている。その配下に唐船山に城を構え、有田郷を支配していた有田唐船城城主松浦丹後守源盛一族が居た。

中世末には各所で起こった動乱において松浦党の諸氏は竜造寺隆信に征服され、伊万里氏・山代氏・有田氏の旧領地は竜造寺氏の支配となり、やがてそれを継いだ鍋島氏の佐賀藩領となった。旧西松浦郡域は、佐賀藩領・唐津藩領の一部となり、かくして唐津領及び天領・伊万里郷・山代郷・有田郷が政治区域の呼称となる。



肥前刀の総合的な研究

－八代忠吉の懸案事項、新左衛門銘の再検討－

肥前刀調査会 代表

横 山 学

1. はじめに

日本刀、その本来の目的は武器である。然し、往時から「武士の魂」と言われて大切にされて来たように、何かしら別格扱いされた部分もあって、世の男達にとっては妙に惹かれるものがある。

明治維新後の廃刀令を境として日本刀の価値観が変わる。武器から美術品へと視点が移行したことにより、日本刀は大きく見直され、鉄の芸術品としては世界の最高水準として注目をあつめているのが現代における日本刀の評価である。今では世界の文化財的な地位にあり、日本刀を愛好する人々は世界各地に多数存在する。

日本刀の歴史は長い、慶長元年（1596）を境として、それ以前の物を古刀と呼び、以後の作を新刀と呼ぶのが刀剣社会の習わしである。忠吉を軸とする肥前刀は新刀期に製作されたものであるが、鍋島家の庇護のもとに活躍した肥前刀工群は、「新刀王国」の名の通り、数多くの名作を遺している。

忠吉といえば五字銘が有名であり、初代忠吉の五字銘は江戸時代の早い時期から賞翫が厚く、現代においても多くの愛刀家に喜ばれている。初代以後の忠吉にも五字銘があって、後代の中では八代忠吉の作に最も多い。

始祖の初代忠吉以来、忠吉家の俗名として聞こえているのが「新左衛門」であるが、九代までの忠吉のうち、長じて後に新左衛門を名乗った者が半数を超えていて、初代のほか、二代、五代、六代、八代の五工が新左衛門である。

五人の忠吉・忠広の中で、新左衛門を添えた長銘の作を遺しているのは、初代、二代、八代の三工だけで、いずれも初官が「左衛門尉」であった者達であり、この銘を添えた長銘の作は三工とも極めて少ない、と認識しておいた方がよさそうである。初代が元和七年紀（1621）の刀に一口、二代は寛永十五年頃（1638）と目される脇指に一口。初代と二代はそれぞれこの一口ずつが確認されているのみで、今のところこれ以外に見聞がない。或いは遺作がほかに在るかも知れないが、今日まで情報に接しないのは遺されていないことの裏付けかも知れない。『新刀弁疑』という江戸時代の書物に、寛永十七年紀（1640）の二代忠広の新左衛門銘があるが、絵図であるのでその資料性は半減する。しかも、その作品が今日に伝承されているかどうか不明である。

上代の二人に比べ、八代忠吉の新左衛門銘が目立って多いことに気付いていたのは筆者一人ではないと思う。八代の新左衛門銘は昭和の初め頃（1937）から書物に案内されていて、近時に至っては達者な文字で切られた同じ銘振りの新左衛門銘が各書で取り上げられているのは、刀剣社会ではよく知られていることである。書物に出ていない物まで集計すれば相当の量に達すると思われ、その量の多さに疑念

佐賀と沖縄との関係

－明治期・沖縄で活躍した佐賀県人－

末 岡 暁 美

1. はじめに

幕末維新期に佐賀藩の活躍はめざましいことは多くの佐賀県人が知ることだが、沖縄で活躍した佐賀県人のことを知る人は少ない。私自身、沖縄の知人より知らされる数年前までは知らなかった。調べようとする佐賀にはまとまった資料はなく、人物史などから断片的な情報を得ることしかできなかった。

ところが、1906年（明治39）に沖縄で生まれた故大塚敏氏と知り合い、100年程前の沖縄の様子を聞くことが出来た。大塚敏氏の両親は佐賀県出身で、父斎藤熊太郎は沖縄県中頭郡の役人であり、伯父は長年沖縄県島尻郡長を務めた斎藤用之助であった。旧制中学までを沖縄で過ごした大塚氏は、すでに90歳を越えられていたが、驚くほどに明晰な頭脳と記憶力で、生き生きとした口調で沖縄のことを語られた。大塚氏の話によれば、大正中期に那覇の映画館を貸し切って佐賀県人会が行われ、参加者は家族を含めてだが7、80名はいたと言う。大塚氏からは興味深い話がたくさん出てきた。これらの事は多くの人に知らせるべきだと思っていたとき、財団法人鍋島報効会の一般公募研究助成制度を知り応募した。歴史の研究者でもなく、知識も乏しいながら、研究助成を受けたことで多くの協力者を得、調査を進めることができた。特に、沖縄へ行き、資料閲覧、聞き取り、現地訪問が出来たことで、佐賀と沖縄にはただならぬ関係があり、先人たちの思いが今も受け継がれていることを知った。

この報告書では、大塚氏から聞いた話を追認した斎藤用之助をはじめ、沖縄で活躍した佐賀県人について報告する。

2. 斎藤用之助

沖縄で活躍した佐賀県人の中で圧倒的多くの資料が残っているのは斎藤用之助（元の名は斎藤安一）である。「葉隠」にも名が残る斎藤用之助は代々襲名され、沖縄で活躍した斎藤用之助は11代である。

沖縄県が設置された直後の1879年（明治12）8月、11代用之助は20歳で沖縄へ渡り、46年間を沖縄で過ごす。2等巡査から出発した斎藤用之助が、1898年（明治31）から1915年（大正4）まで17年間務めた島尻郡長を依願退職する際には、盛大な送別会が開かれ、会場である東風平の記念運動場には1万人余りの郡民が集まり、会場からあふれた人々は周辺の森や高台まで群をなしたといわれる。当時の新聞がその様子を「斎藤氏送別会一空前の盛況一慈母に分かれる思い」という見出しで報道している。

斎藤用之助の業績は多方面にわたっているが、その中から、鳥島移住及び用之助港について報告する。

佐賀県における「戦争碑」に関する一考察

～明治二十年前後の招魂碑を中心に～

北方町立北方中学校

中 村 真

1. はじめに

いわゆる「戦争碑」の研究については日本の近代戦争に関する研究の新しいテーマの分野である¹。また兵士の死がどのように取り扱われたか、死者の状況を実態的にとらえた研究はあまり多くはないが、戦死者の問題を通して地域社会の変容を考えていくことは重要なテーマである。

その際に資料として重要となるのが、記念碑、忠魂碑である。これらの戦争碑の研究はこれまで主として、日清戦争期を基点としてその歴史的な背景、その宗教的な性格をめぐっておこなわれ、または個別の戦争とのかかわりで研究が行われてきた²。特定の地域を調査対象とし、明治10年前後から昭和前期までを通じて戦争碑の変遷をとらえた研究、また戦争碑の変容を徴兵制とのかかわりで考察したものは少ない。戦争碑研究は単に戦死者の慰霊・顕彰の面からの検討だけではなく、徴兵制、軍事援護事業とのかかわりで検討していく必要がある。それは戦争碑が徴兵制や軍事援護事業を補完する役割を果たす中で登場し、全国各地に建立された経緯があるからである。

ところで戦前の郡町村誌は戦病死者の氏名を載せ、戦争碑について触れることもあるが、戦後の市町村史は一部を除いてそのことにほとんど触れない。現在こうした戦争碑を探すためには地元の調査に参照しなければならないが、文化遺産や遺跡とは性格が異なるため、その調査報告は少ない。

一般に刊行されていないが、佐賀県下では戦後50年を記念して、佐賀県護国神社を中心として忠魂碑等の調査が進められた。調査の内容は忠魂碑・慰霊塔の住所・碑文・慰霊祭の有無・慰霊祭の日時・宗教・主催者団体名・英霊の柱数・記念事業などである。この調査は地域的に遺漏がみられ地域によって調査の精粗もあり、悉皆調査とはいえないものであるが、戦争碑の総合調査として資料的価値がある。この調査では県下7市、30町村、忠魂碑・慰霊碑114件が確認されている。筆者は佐賀県下における戦争碑の現地調査を2001（平成13）年より実施した。調査の内容は所在地・碑銘・建立（撰文）年月日・揮毫者・撰者・戦死者名・建設主体・従軍者・隣接地域及び所在地の空間などである。調査の方法は、県内の旧郡域を目安として6ブロックにわけ、佐賀県護国神社の調査内容の現状確認をおこない、それ以外の記念碑については1889（明治19）年の地方行政機構の範囲を一つの単位として、その中にある神社・寺院・学校などを調査した。調査箇所は約200か所である。調査の記録については、記録用紙に記入し、デジタルカメラで現状を撮り、必要に応じて拓本をとった。また調査に際して太平洋戦争後に建設された戦争碑についてはその数が多く、これらは別の文脈で考察する必要があるので、今回の調査対象からは除いた。ただし、戦前にすでに建設されていて、戦後直後に破壊され、その後再建されたと思われる戦争碑については、戦前の状況が読みとれる内容を精査して整理した。佐賀県内では、戊辰戦争、「佐賀

第4回研究助成報告会講評

佐賀大学学長 長谷川 照

鍋島報効会から平成16年度研究助成発表会の講評を依頼されました。発表の内容は私の専門分野（物理学）とは程遠く、的確な講評は出来ないことをご了解していただいたうえで、お引き受けいたしました。講評もまた今後の議論、検討の材料を提供したものとお考えいただければ幸いです。

皆さんの発表をお聞きして、佐賀には多くの未発見の文化財・歴史資料とそれに取り組む多くの人々が存在することに心地よい感動を覚えました。私ども佐賀大学も、古文書、古典籍を中心とする文系基礎学の研究センターの設立を計画しています。僅かな研究員と研究費ですが、皆さんの大きな応援と協力で、佐賀の歴史・文化を未来に繋げることが出来ると自信を持たせていただきました。

1. 松浦党有田氏と鍋島藩有田代官所

地域づくり研究所 伽企画 代表 藤 泰 治

<評>

「街道は見ていた」との著者の意図が感じられる報告書である。9世紀から21世紀の今日まで街道の移り変わりとそれに伴う人々の生活の状況が推測される。有田周辺に住んできた人々のルーツ、文化・歴史・伝統を探り、そしてそれに飽き足らずこれからの生き方を模索する（企画書の提案）、少々大げさに言えばその様なことを著者は考えているのかと思われ好感が持たれる。

「大木の宿」は著者の野心（？）を満たす宿場、日常生活の多くが今日まで引き継がれている宿場である。季節毎の祭りがいまだに行われている稀有な宿場と言って良い。祭りを通じて時代の風俗と思想・哲学を知ることが出来る。風俗は変化するが思想・哲学は引き継がれる。

とくに、風の祭り「十八夜」は外国のガイドブックに紹介されている国際的に知られた祭りで観光客も多いとのこと、大木の宿場が日本の伝統・文化を維持伝承する大きな役割を担っていることに驚きと喜びを感じる。

「大木宿宿場筋再生計画」に期待する。本報告書は大木宿宿場筋の再生をもって完成するもの考える。

最後に、「松浦党有田氏の誕生」から「関が原の戦いに出兵」までは解説、導入部分で新しい発見、主張が読み取れない。テーマを鍋島藩有田代官所「大木の宿」とされた方が良いように思われる。

財団法人鍋島報効会研究助成
研究報告書 第2号

2006年1月

発行 財団法人鍋島報効会
佐賀県佐賀市松原二丁目5-22
TEL/FAX 0952-23-4200
URL:<http://www.nabeshima.or.jp>
印刷 (株)佐賀印刷社
